

鶉殿ヨシ原の筆筈ヨシの文化的価値と伝統知の保全 及び筆筈ヨシ再生に関わる技術的条件

柴田, 知己

<https://hdl.handle.net/2324/6787620>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	柴田知己		
論文名	鶺鴒ヨシ原の筆筭ヨシの文化的価値と伝統知の保全及び筆筭ヨシ再生に関わる技術的条件		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 包清 博之
	副査	九州大学	准教授 朝廣 和夫
	副査	九州大学	准教授 高取 千佳

論文審査の結果の要旨

令和3年2月9日に最終試験を兼ねた論文公聴会が開催され、学内外から24名の出席を得た。

柴田知己から、提出された学位申請論文の説明を受けた後、調査委員の包清博之教授（主査）、朝廣和夫准教授（副査）、高取千佳准教授（副査）がその内容について主に質疑し審査した。

重要無形文化財である雅楽で演奏される筆筭（ひちりき）のリード部分（蘆舌（ろぜつ））に用いられる筆筭ヨシは淀川中流の鶺鴒で採取された物が用いられることになっている。しかしながら、筆筭ヨシの採取者や鶺鴒のヨシ原を取り巻く状況が変化し、鶺鴒での継続的な筆筭ヨシの採取が危惧される状況となってきた。また、国内外においても、伝統知としての熟練者による筆筭ヨシ採取手法や筆筭ヨシに求められるヨシの品質の確保やその再生に関する技術的条件は明らかにされていない。本論は、このような背景を踏まえ、筆筭ヨシの採取手法の継承や筆筭ヨシの品質水準を満たすヨシの栽培などを可能とする技術的知見を得ることを目的とした実証的研究であり、次の7つの章で構成された。

第1章では、研究の視点と意義及び目的として、重要無形文化財である雅楽の価値を継承する上で重要となる鶺鴒ヨシ原のヨシの文化的価値、鶺鴒ヨシ原の衰退状況、鶺鴒ヨシ原の復元の取り組み状況、ヨシ原の生育環境や再生・回復、ヨシ原の景観や管理、鶺鴒ヨシ原・鶺鴒ヨシ・筆筭ヨシなどに関する既往研究等の整理・検討を踏まえて本研究の目的と意義が示され、二つの研究課題が設定された。第一の研究課題は、筆筭ヨシの採取に関わる伝統知の技術的特徴を明らかにする内容である。第二の課題は、筆筭ヨシの再生に関わる栽培技術をヨシの実生苗及び地下茎苗の栽培実験を通じて筆筭ヨシ相当の品質のヨシの取得を可能とする技術的条件を明らかにする内容である。

第2章では、研究方法として、まず上記の第一の研究課題に対応するため、鶺鴒ヨシ原で採取される筆筭ヨシを分析することで、熟練者が有する筆筭ヨシ採取手法の伝統知を採取地（鶺鴒ヨシ原の一部）での採取条件として明らかにし、また、筆筭ヨシの品質や採取効率に関わる採取場所の選定条件を明らかにするための調査・研究方法が示された。次に、上記の第二の研究課題に対応するため、鶺鴒ヨシ原以外でのヨシの栽培試験の実施と筆筭ヨシの品質水準を満たすヨシの採取効率を評価する調査・研究方法が示された。

第3章では、第一の研究課題に対応するため、筆筭ヨシ採取者の伝統知の技術的側面の検証として、筆筭ヨシと筆筭ヨシ以外、筆筭ヨシ採取地と筆筭ヨシ採取地以外の比較を通じて、熟練採取者が筆筭ヨシを採取する際の伝統知が採取技術として明らかにされた。また、伝統知として筆筭ヨシの採取地を選別するためのヨシの草丈などが明らかにされた。具体的には、熟練採取者へのヒアリング、ヨシ原の水没状況からみた陸ヨシ及び水ヨシの分類とコドラート調査を通じて、ヨシ生育密

度、草丈、茎径、土壌硬度が計測・比較され採取効率の違いが示された。結果として、筆筭ヨシの採取地は土壌が軟らかい（Nd 値 3.3 以下）こと、草丈が高く（4m 程度）、茎径（2 節下）が太く（11mm 以上）茎密度も大きく、折れていないことなどが熟練者による筆筭ヨシの採取・選別の技術的条件となっていることが明らかにされた。

第 4 章では、第二の研究課題に対応するため、鶴殿ヨシ実生苗の育成試験・栽培試験によるヨシ成長過程の把握として、実生苗を使用した筆筭ヨシの品質水準を満たす年数とヨシの条件が示された。具体的には、2013 年～2015 年の実生苗育成試験では地下水位と施肥の違いによるヨシの生長量の違いを把握するための 12 条件の育成試験（ポット）が実施され、ヨシの本数、地上部の草丈、茎径、乾燥重量等が計測された。2015 年～2021 年の実生苗栽培試験では、実生苗育成試験後の 12 条件の各 4 試験体の成長量、「灌水区（地下水位∞）・無施肥」のヨシの本数、地上部の草丈、茎径、乾燥重量等が計測された。結果として、実生苗 7 年目のヨシが最も高品質であり、第 3 章で明らかにされた熟練者による筆筭ヨシの採取・選別の技術的条件を満たすヨシが栽培可能であることが示された。

第 5 章では、第二の研究課題に対応するため、鶴殿ヨシ地下茎苗の育成試験・栽培試験によるヨシ成長過程の把握として、地下茎苗を使用した筆筭ヨシの品質水準を満たす年数とヨシの条件が示された。具体的には、2014 年に地下茎苗育成試験が実施され、鶴殿ヨシ原から切り出されたヨシの地下茎を培土内で出芽させ、それを栽培基盤内で生育させ、地上部及び地下部の生長量が計測された。2017 年～2020 年の地下茎苗栽培試験では、地下茎を栽培した植栽基盤から地下茎が採取され、屋外試験地に植栽され、地上部の生育本数、草丈、地下部の地下茎の乾燥重量等が成長量として計測された。結果として、地下茎苗栽培試験では、2 年目の成長が最も大きく、時間経過とともに草丈、地下茎重量が増加することなどから、地下茎苗を用いた筆筭ヨシ復元の可能性が示され、また地下茎苗が入手できる場合は実生苗の植栽よりも、時間的な早さと栽培の簡便性から地下茎苗を用いた植栽方法が有利であることが示された。

なお、第 3 章、4 章、5 章では、NEXCO 西日本が高速道路事業に伴い、事前に鶴殿ヨシ原で計測したデータ及び緑化技術センターで実施された栽培試験データが用いられた。

第 6 章では、筆筭ヨシの品質保証と取得率及び筆筭ヨシの再生として、第 3 章、4 章、5 章での結果から、鶴殿ヨシと鶴殿ヨシ原以外の試験地のヨシが比較され、筆筭ヨシの取得率が評価された。結果として草丈 4m 以上で茎径 11mm 以上かつ折れていないヨシを筆筭ヨシの品質水準とする取得率を設定し、その達成率を目安とすることで、単位面積あたりの筆筭ヨシの収穫数を、鶴殿ヨシ原での伝統知による筆筭ヨシの収穫数と同程度とできる可能性が示された。

第 7 章では、伝統知と筆筭ヨシ再生による重要無形文化財である雅楽の継承として、2 つの研究課題に関する調査・研究の結果から、「熟練者の伝統知」、「筆筭ヨシの再生」、「重要無形文化財である雅楽を継承するための筆筭ヨシの展望」が考察された。

これらの成果として、伝統知による筆筭ヨシの品質と採取に関わる技術的条件、筆筭ヨシの品質水準を満たすヨシの栽培等に関する技術的条件が明らかにされた。このことで、熟練者の高齢化にともなう伝統知の消失や筆筭ヨシが採取可能な鶴殿ヨシ原の消失等に対応可能な筆筭ヨシの再生の可能性が示されている点など、重要無形文化財である雅楽の継承に必須の植物材料を獲得するための新たな技術的枠組みの確立に有用な論拠と課題を導いている。

本学位申請論文は、論文構成、研究の意義、調査・検討方法、結論は妥当であり、非常に意義深い内容であることから、論文調査委員全員の合議の結果、博士(芸術工学)の学位の水準を満たしていると判定した。